

なぜ旧体育館保存を願うのか

かけがえのない価値があります

- ◆「旧体」は“建学の精神”の礎 寮と西校舎と共に真っ先に建てられ、キャンパス中央に位置する「体育兼社交館」。その献堂式・学長就任式（1924年6月）で安井哲二代学長は、本学の教育の基本に、①キリスト教主義に基づく人格教育、②体育の重視、③リベラル・カレッジの性格、④学究生活と社交生活の調和の4つを挙げられました。うち2つの実現のために旧体は存在しているのです。入学式・卒業式・記念式典など、大学の歴史を深く刻み込みながら。
- ◆守るべき“文化財” 日本の建築界を代表する日本建築学会、日本建築家協会、DOCOMOMO Japanをはじめ建築関連団体、市民団体がこぞって保存要望書を提出しています。BSフジでご覧になったように、日本モダニズム建築の代表がここ善福寺キャンパスを構成する9棟のレーモンド建築群です。これ以上壊してよいのでしょうか。「本物は“残してよかった”か、“残せばよかった”しかありません」（永井路子）。
- ◆若者を惹きつける貴重な“資源” 人気のロック・グループEXILEがビデオのロケに選んだ「旧体」。築80年の旧体を「新しいじゃん！」と評した彼らの感覚こそ、今の若者の感性。旧体のレトロな魅力は受験生にアピールする資源でもあります。大学の生き残り策としても有用な旧体は、他大学“垂涎的”。

これからも学生に必要な旧体

- ◆先生方が「旧体保存」を切望 本学で体育授業・健康指導にあたっている現役の先生方が、授業を十全に行うために、新しい体育館棟竣工後も、旧体が必要であるとして、その維持を切望しています。
- ◆多彩なサークル活動を保証するために 学生生活の充実度のバロメータであるサークル活動（球技系・ダンス系等々）、多彩で多様な課外活動にとって、旧体は必須。現に今も隙間なく学生に使用されています。
- ◆建物を通して知る大学への誇り 昨年度の東京女子大学学会・学生グループ研究奨励の最優秀賞に輝いた「東京女子大学の旧体育館を中心とする校舎の研究」。園遊会で研究発表をした学生は、「歴史ある建物で学べるのは、伝統ある大学に入学した私たちの特権です」と胸を張りました。在ってこそ伝わる伝統。

安全性は専門家のお墨付き

- ◆関東大震災（阪神・淡路大震災の14.2倍のエネルギー放出量）に耐えた実績 旧体は本当に危険なのか。大震災に耐えた実績をもつ旧体（「体育館は無傷で建っていた。」レーモンド自伝、p.89）。被災で耐震性が低下することはありません。これが専門家の常識。現在の堅牢性についてもお墨付きです。
- ◆計算し尽くされた耐震構造 西澤英和氏（関西大学、耐震工学・建築構造学）をはじめ、多くの専門家が旧体の優れた耐震構造を指摘しています。①フロアを掘り下げた低い構造、②体育館フロアの大空間を両翼の2階建て教室棟が強固に支えるダブルコア構造、③天井を走る3本の鉄パイプの揺れ止め効果、④両翼の教室棟を繋ぐバルコニーにも揺れ止め効果。
- ◆耐震診断のデータ開示を 大学理事会は低耐震性・老朽化を主張する根拠を示していません。解体か、保存か、専門家を交えた検討の場をもって、互いに理解を深めあう努力をぜひ！

補修や維持のお金は？

- ◆解体費を補修費に わざわざ更地にするための巨額な費用、そのお金を補修・維持に充ててください。
- ◆補修・維持に公的補助も 大学が保存の意志を示せば、区の指定文化財、あるいは国の重要文化財として認められる可能性は大です。旧体を除く7棟は登録有形文化財で、その補助は設計監理費の半分（全体の約5%）にすぎませんが、区の補助は補修費全体の何割かという高率。重要文化財指定の学校建築は慶應・奈良女をはじめ32件、文化庁は「使われなければ残らない」と、条件を緩和して補助を出しています。

本学の教育理念「全人教育」を象徴する旧体育館解体中止の英断を！